

2021

## 矢切通信

### 第二十八話



→日曜日、  
家族連れの  
客が何組か  
あった。

←矢切の高齢者たちは元気だ。コロナ下にもかかわらずゲートボウルを楽しんでいる。みんなワクワクを打ち終えたのだろう。



二週間がたった。大相撲が終わり、ようやく普段のペースに戻れるが、今週はまだ影響が残っている。

結局、七場所ぶりに戻った白鵬が全勝優勝した。しかし、喜ばしい事ではなく腹立たしいことの連続だった。

たとえば二日目の遠藤戦。立ち会いにいきなり顔を平手で何発もなぐり、上手だし投げで破った。十四日目の大関正代戦では仕切戦から後ろに下がり、土俵ぎりぎりまで下がり仕切った。

仕切り線は何のためなのか。日本の相撲では、仕切線を中心に相撲をとることになっている。モンゴルとは違う。

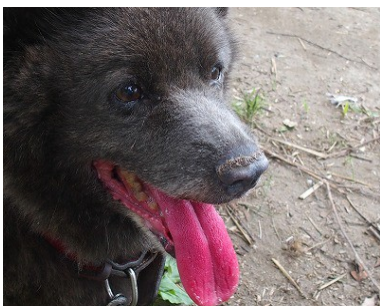
千秋楽の照ノ富士線では、あれほど不評だった「かちあげ」を使った。「かちあげ」と言うより肘打ちつまりプロレスでいうエルボースマッシュだ。

相撲協会は何も言わないが、注意ぐらいはするべきだ。このまま白鵬が相撲界に残って弟子を育てたら日本の相撲は大きく変わってしまうだろう。

たとえばエルボースマッシュだったり立ち会い、いきなり膝げり等も取り入れかねない。そうなると相撲は死ぬ。

## 今週のクマ

→クマの舌はラジエターだ。暑さをしのぐ道具だ。氷イチゴを食べて赤くなっている舌。



→自転車で通るたびに赤く熟れたら盗難にあうのではと心配していたが、このまえ通ったらネットをかぶせてあったのでホッとした。



さつさとモンゴルに帰って白鵬の考える相撲をやればいい。世界中の人を入門させてモンゴルで自分の思い通りの大相撲をやったらどうだ。

日本の相撲界に白鵬は必要ない。白鵬がいなくても十分おもしろかったではないか。相撲協会よ考えろ。

さて相撲の話はここまでにして、矢切の話に戻ろう。矢切では、河川敷に多くの人が集まってゲートボールをしていたが、全員が高齢者ばかりだった。

矢切では新型コロナウイルスのワクチンが、六十五歳以上の人たちには、ほとんどが打ち終えているのだろう。従って多くの高齢者たちが集まっているのだろう。男も女も参加して楽しんでいた。

話はワクチンに戻るが矢切の渡しの舟頭さんの三十前の長男が接種券が届いたので舟頭さんの同級生のやっているクリニックに予約を取りに行ったところ、たまたまキャンセルが出たというので、その日に打ってもらったと言って帰ってきたそう。世間ではウイルスの不足が問題になっているようだが、松戸市ではその心配はないようだ。八月一杯には五割の人が打ち終えるだろう。拍手ものだ。